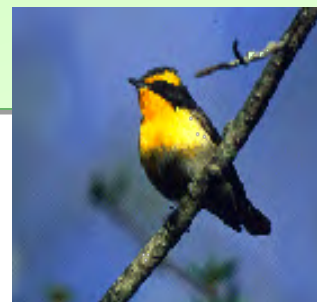


■170602 多核種除去設備等処理水の取り扱いに関する小委員会

福島復興を進めるために 廃炉と地域・社会のコミュニケーション を考える



福島県のシンボル、ケヤキ・キビタキ・ネモトシャクナゲ(県HP)

崎田裕子

ジャーナリスト・環境カウンセラー

NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット理事長

これまでのコミュニケーション経験

<理念> 暮らし・地域の環境負荷に 市民・NGOとして責任を持ち
持続可能な社会づくりに貢献する

<具体化のポイント> 多様な主体の「連携」で「共創」する

くらしの
ごみとCO2

くらしの
化学物質

高レベル
放射性廃棄物

福島の放射
性物質汚染

市民・企業・行政との
パートナーシップで実施

公設環境学習センター
指定管理者（自治体と連携）

3Rめざすマルチステークホル
ダー会議（企業・行政と連携）

アジア3R 推進市民
ネットワーク（環境省と連携）

全国各地で
学び合う場づくり

「高レベル放射性廃棄物
の地層処分」に関する
地域ワークショップ
（資源エネ庁事業）

専門家・
NGO・行政
の情報共有

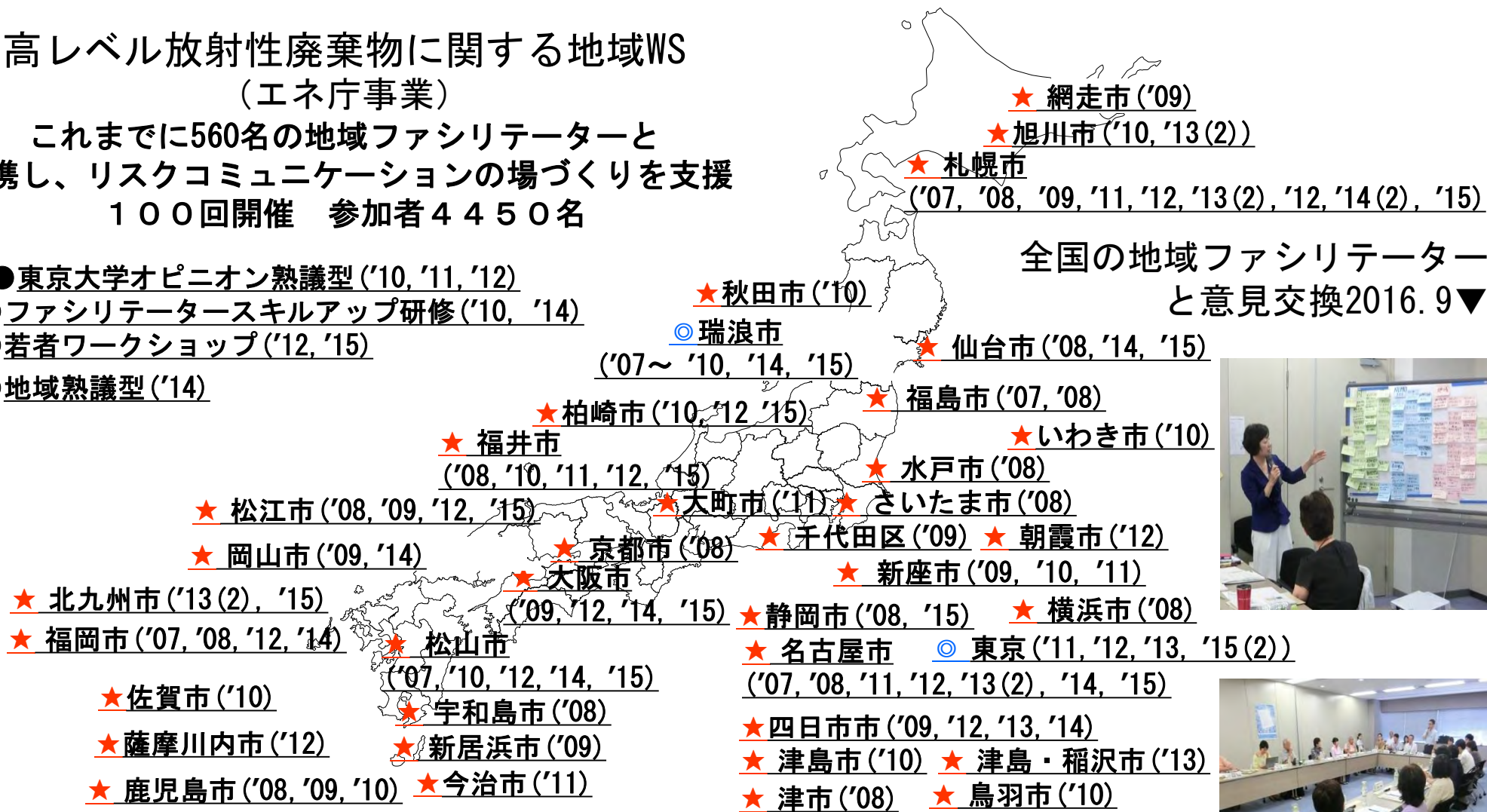
「環境回復
勉強会」

2007年以来全国で地域ワークショップの開催を支援 学び合いの大切さを共有する「地域ファシリテーター」との連携

高レベル放射性廃棄物に関する地域WS (エネルギー事業)

これまでに560名の地域ファシリテーターと
連携し、リスクコミュニケーションの場づくりを支援
100回開催 参加者4450名

- 東京大学オピニオン熟議型('10, '11, '12)
- ファシリテータースキルアップ研修('10, '14)
- 若者ワークショップ('12, '15)
- 地域熟議型('14)



全国の地域ファシリテーター
と意見交換2016.9 ▼



2015年度までの状況 (2016年3月末現在)

◎ : 全体会議開催回数 (UKO) : 開催年度

エネルギー事業に協力 運営担当 : 持続可能な社会をつくる元気ネット

地域WSのコミュニケーションからの学び

- ・ 長年、エネルギーの事は事業者任せにしていた。
- ・ 高レベル放射性廃棄物の処分問題を初めて知った人が多く、情報がない驚き。



- ・ 2011年原子力の事故。原子力への不信・不安。
- ・ 「安全神話崩壊」以降、安全ですと言われることへの反発

- ・ 情報は「信頼」できるのか？「安全」を「安心」に変えるには？安全に向けて真剣に努力してるか？その姿を「信頼」できるか？

● <リスク・コミュニケーションの3要素>

- ① 「情報公開」 説明責任・情報開示・わかりやすい情報提示
- ② 「対話」 一方通行ではなく質疑応答や意見交換を尽くす
- ③ 「参加と協働」 課題解決に向けて市民・地域・社会との連携



福島第一原発事故後の取り組み 「環境回復に関する勉強会」(2011～現在)

- ◆2011年6月3日の第1回目から、6年間に45回開催
 - ・放射性物質汚染からの一刻も早い環境回復・復興を願い、環境・廃棄物や原子力分野などの専門研究者、各省庁担当者、企業、自治体、NGO等対処に直接係る人々が呼び掛け合い、最新情報を基に意見交換。登録者400人、毎回30～50人参加
- ◆呼びかけ人共同代表 東大大学院森口祐一教授と崎田で実施
- ◆意見交換テーマは、除染などの進展に合わせて参加者で検討
 - 「空間線量マップに基づく汚染物推計や環境回復シナリオ検討」
 - 「放射性物質汚染廃棄物・土壌等の処理シナリオ」
 - 「除染ガイドライン、仮置き、中間貯蔵に関する意見交換」
 - 「環境動態研究などの成果を環境回復・復興にどう活かすか」
 - 「住民の方々の今後に資するコミュニケーションのあり方」
 - 「環境回復・福島再生に向けて、廃炉と地域対話を考える」

福島の方々の「想い」も時間経過で変化。



福島県・原子力学会「除染推進に向けた地域対話フォーラム」
(2012～2013)のファシリテーション経験から

- ◆東日本大震災による津波で原子力発電所事故。「安全神話の崩壊」
放射線リスクを伝えてこなかった「事業者や専門家・国への不信感」
「抑えられない 怒り・悲しみ」



- ◆避難した方々含め、不安・不満はICT活用で瞬時の広がり
マスメディアにも不安あおる専門家の声
社会不安の増幅、福島への風評被害の高まりに「困惑」



- ◆「信頼」の再構築に向けて、「顔の見える信頼」づくり
「過剰なリスクと、付き合うリスク」を伝える専門家への信頼
除染・環境回復から復興にむけた生活再建、地域再生への想い

2012

「除染情報プラザ」の取り組み事例から

2012年1月、除染や放射線の情報を伝える拠点として福島駅近くに開設。

「人から人へ情報を伝える」「人と人が話し合う」「人が人をサポートする」

①情報提供 ②対話の場への専門家派遣 ③地域とのコミュニケーションを推進。

①除染や放射線に関する情報の提供

タッチパネル、大型モニター、映像や模型でわかりやすく。来館者の疑問を常駐スタッフに相談。



②専門家派遣移動展示

専門家を市町村や町会、学校などへ派遣。パネルや模型の移動展示や学校への出張セミナーも。



③地域とのコミュニケーション

除染や放射線に関して、地域の方々とともに学び考えるためのセミナーやワークショップの実施、除染や復興に向けた活動を紹介する企画展示。気軽に利用できるサロンスペースなど、コミュニケーションの場も提供。



資料「除染情報プラザ」 <http://josen-plaza.env.go.jp/>

「ポジティブカフェ」情報交換の場づくり

2013年、地域で除染・モニタリング活動や放射線不安低減など、福島再生に取り組む方々の 情報交換・経験共有の場づくり。



地域活動としての放射線対策、線量低減活動の高まり



- ・第1、2回は主に線量測定や線量低減化等に取り組む方々からの事例紹介。
- ・第3回は農地の測定などに取り組む専門家や避難者支援団体の方などと情報共有。

地域コミュニケーションの進展

中通りから浜通り地域で情報交換の場づくり

2014

県外避難者の視点もふまえ、中通りの放射線不安への対策と実践

第1回ポジティブカフェ



個人線量の測定体験 勉強会



食に関するワークショップ



県外避難から戻った方の意見も踏まえ、紙芝居で放射線を学ぶイベントや、地元食材を用いた陰膳調査体験、個人線量の測定体験勉強会など、「測る」「知る」活動を実施。

2015

浜通りを中心とした地域との連携、情報共有へ



いわき、南相馬、楡葉と、浜通りの地域で「ポジティブカフェ」を開催。浜通り地域の方々が抱える放射線や除染後のくらしの不安、福島再生へ取組みを情報共有し、不安の低減と課題解決に向けて一緒に考えました。



知る、考える、進めるために。

除染情報プラザ

地域コミュニケーションの進展

「くるまざカフェ」ふくしま“みち”さがし

2016

企画委員会をふまえ、「ふくしま“みち”さがし」で一步ずつ前に

「くるまざカフェふくしま“みち”さがし」。WSで体験プログラムづくり



放射線不安と向き合い、日常を取り戻すため一步ずつ前に向かっていく方々の情報を共有し皆が知りたい、体験型企画を考案。

ふくしま“みち”さがし 体験プログラム

「浜通りとあぶくまの森林里山のいまを知る」「食の安全対策とふくしまの美味しいものさがし」

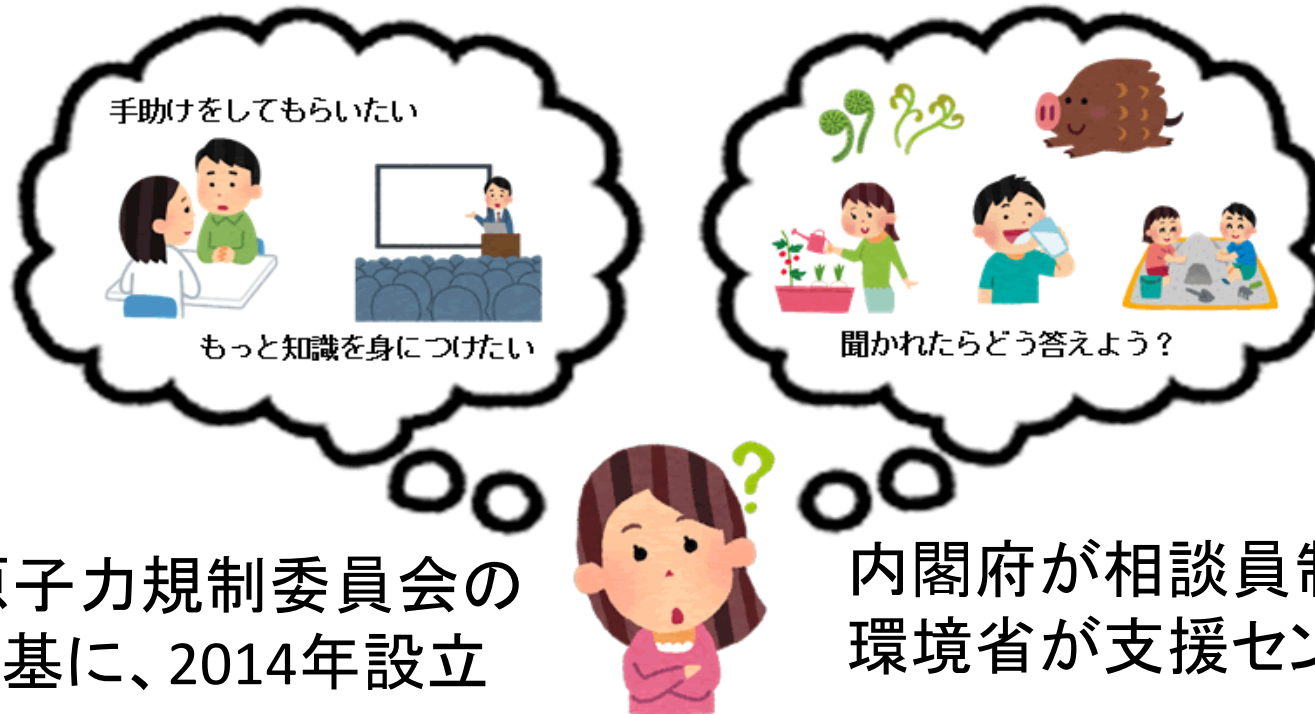


資料「除染情報プラザ」

©2017 YUKO SAKITA

放射線不安に寄り添う「相談員」を支える 放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター

2014



手助けをしてもらいたい

もっと知識を身につけたい

聞かれたらどう答えよう？

2013原子力規制委員会の
提言を基に、2014年設立

内閣府が相談員制度を推進。
環境省が支援センターを運営

避難指示の出た12市町村で、放射線不安対応を行う相談員や大学等の研究者、生活支援相談員、復興支援員、行政職員の方々を対象に、住民の方々の放射線に関連した相談への対応、測定へ専門家派遣、放射線知識に関する研修など、活動を支援。支援センターはいわきに。

図・資料は相談員支援センターHPより

廃炉の風評被害対策全体の流れをイメージする

- ・ 浜通り地域に住み続けている方々、帰還された方々、帰還を悩んでいる方々にとって、廃炉情報は将来に関わる重要課題



- ・ トリチウム水の処分は、廃炉の道筋の第一歩と位置付けを。廃炉全体でどのような作業が予定されているのか、福島復興には欠かせない道筋として、地域の方々の理解を。



- ・ 放射線リスク低減に向けた事業者・国の努力が地域の農林漁業者、住民の方々に「信頼」されることが鍵



- ・ 周辺地域の方々の信頼を得られれば、広く社会の共感を呼び、流通の見直しに向けた取り組みにつながる。

まず周辺地域の方々と「信頼」の回復

第1ステップ 情報公開

わかりやすい「情報」、
技術情報だけでなくプロセス情報が重要



第2ステップ 対話をつくす

一方通行の情報発信では心に届かない
不安・疑問に寄り添い、質疑応答を尽くす



第3ステップ 地域の方々の参加・協働

地域で放射線測定活動や対話活動、まちづくり活動等
をしている方々と共に、意見交換や現場の体験共有

地域の「信頼」を社会全体の「信頼」回復に 風評被害対策

第4ステップ 参加・協働

地域で自分たちの農林漁業や仕事・行動に誇りをもって取り組む人たちの、活動の「見える化」



その人たちを応援する輪を広げ
全国の流通関係者にも体験機会の提供



安全チェック体制を整備しおいしい食材を届ける
努力を続ける福島の人々の姿が全国の人の心を動かす

提案のまとめ

- ① 廃炉に関する地域対話の場「廃炉対話館」仮 を設置。
トリチウム汚染水対応から始まる廃炉全体の情報共有。
- ② 丁寧に質疑応答をつくり、対話の中から復興に向けて
地域の方々が納得する方向性を見出す。
- ③ 放射線不安を払しょくし、農林漁業に積極的に取り組む
福島の方々の活動の情報共有・体験交流の機会を持つ。
- ④ 全国の流通のキーパーソンにも体験交流に積極的に
参加を促し、風評被害の改善につなぐ。



そして福島は、重大事故から立ち直る「世界の学びの場」に

